

保育の体験と思索

——子どもの世界の探求——(六)

津 守 真



三歳児の秋は、幼稚園でも、いろいろの点で夏まえとは違ったことが見られる。子どもたちだけで群をなして走りまわる姿がある。秋になってはじまり、秋の間つづいて見られたことに、劇あそびのようなことがある。指人形を手にして、人形舞台の前で、三、四人の子どもたちがたむろしている。女の子が私のところに来て、「おじちゃん、七人の小人しよう、まほうつかいのおばあさんになって」と言ったりする。このことが私にとって印象的だったのは、家庭児A（三歳児のとき幼稚園にはいっていなかった）の三歳の秋にも、同様に劇あそびのようなことがしばしば見られたからである。そこで次に家庭児Aを主にしてみることにする。

四歳の誕生日

Aの四歳の誕生日は大へん印象的だった。一週間くらい前から「Aちゃんいつになったら四つになるの？」と、毎日、毎時間と言ってよいくらいおとなにたずねていた。これまでも、毎年、誕生日には部屋を飾って、ご馳走をしてにぎやかにしていたが、誕生日の前から楽しみにして待っていたのは、はじめてである。毎日、毎時間のようにたずねていたのは、その時がくるのをいかに待っていたかを示している。そしてその日が来たときには、夢見心地のように、にこにここと茫然としていた。過去と未来と現在とが一つに重なったのがその当日と言えよう。

三歳児の秋には、クラスの半分以上の子どもが四歳の誕生日を迎える。彼らは多かれ少なかれ、似たような誕生日を待ち望む日々の経験をしているのだから。四歳の誕生日は、子どもが自分の

ものとして体験する最初の誕生日と言えるかもしれない。三歳のときは、その日になれば、自分の誕生日とわかるだろうが、前から待ち望むほどではない。二歳の誕生日は、にぎやかな気分を喜ぶだろうが、自分の誕生日という認識はないであろう。

9月25日

劇あそび

先日から、にほんむかしばなしの『かえるのえんそく』で、大阪の蛙と京都の蛙の話がAは気に入って、何度も繰返して読んでやっていた。それから、『にげたにおうさん』のはなしも、何度も何度も読んでくれとせがんでいた。

今日は母親が、「おおさかのかえるです、きょうとがみたいな」と言う、Aは「あたち、とうきょうがみたいな」と言う。母親が「おべんとうもってでかけよう」と言って風呂敷包をかついで歩くと、Aも「おべんとうもってでかけよう」と言っ、包をもつて歩く。こうして大阪の蛙と京都の蛙の話らしく、会話と動作がつづく。

その次に母親が、『にげたにおうさん』の中の力持ちになつて、「トントントン、ちからもちのおうちですか」というと、二歳

児のPが「ポッー」と言う。(その話の中で、どこからともなく、ポッーというおおきなおとがきこえてきて、におうさんが、「あれはなんですか」ときくとところがある。)母親が「あのおとはなんですか」というと、Aは「むすこさんのあちおとです、ポッー」という。それからAは力持ちの息子になつて、「どしどしどし」と足音をたてて帰ってくる。母が「あの音はなんですか」というとPが「じしんです」と言う。Aは「むすこのあしおとですつていうの」というとPは「むすこのあしおとです」と言い直す。こうしてAと二歳のPと母親との間の会話と動作がつづいて面白い。何十遍もくり返して読んだ本だから、自然に会話と動作がつづく。もちろん本の通りの話の筋ではなく、子どものとらえたところを出してゆくの、子どもがどこを印象づけられたかがわかる。

大阪の蛙と京都の蛙では、風呂敷包のお弁当をかついで出かけて歩いていくところは、Aの最も好んだところである。Aはここにして包みをつくり、かついで歩く、もちろん、大阪とか京都とかの地名は、子どもにとってはほとんど意味をもたないので、Aは東京がみたいと言ってしまう。Aにとっては、お弁当を包んで出かけるということが、心を躍らせるところである。

力持ちの話では、ポッーという音がきこえて、どしどしと力持

ちの足音が次第に近づいてくるところが関心のあるところである。Aはどしんどしんと足音をたてて歩く。Aはもつと小さい一、二歳のころ、音をこわがった。遠くから聞こえてくるたいこの音、飛行機の音などにおびえておとなにしがみついていることがしばしばあった。年少の妹がつみきでドアをドンドンと叩くと、とんできて髪を引張ったりした。三歳をこえた時にも、大人にはきこえないくらいの遠くからの小さな音にも、「あれ何の音」ときき耳を立てたり、雨や風が雨戸を揺すぶる音に、夜中でも目覚ました。遠くから聞こえてくる物音は、何か巨大なものが次第に押し寄せてくるような感じを与えるものである。このAが力持ちの話で、近づいてくる足音のはなしに特別ひきつけられた。そして、自分がどすんどすと足音をたてて歩く。物語の中で子どもが特別に関心を寄せる個趣には、その子どもの体験が背景としてあると考えてよいのかもしれない。あるいは物語の作者や語り手が、人間に共通の体験をとらえてそれを物語として作り出している、子どもによって、強くそこに印象づけられるのかもしれない。

Aは物語の中で印象づけられた場面を、母親や妹と共にやってみて再現し、自分の体験をたしかめ、また克服しているのではないだろうか。自分が力持ちになって足音をたてて歩くときには、

自分が音を出す者になり、音の出所を自分で認識している。また母親や妹が力持ちになって足音を立って歩くとき、それはもはやしんから恐れるものではない。このような劇あそびで、Aは近づいてくる音を克服しているのを見るのであるが、それは生の現実の一部であり、すべてが解消するのではないことはもちろんである。ずっと後年になっても、押し寄せてくる宿題や試験の前に立ちすくみ、おびえ、それに打ちかつのに人並み以上の努力を費しているのがこの子どもである。

三歳児の秋には、幼稚園でも家庭でも、劇あそびのようなものがあちこちに見られるが、その劇あそびの中で子どもは、自分の過去の印象深い体験を現在に再現し、その体験の中にあるものを見きわめようとしているのではないかと思われる。物語による劇あそびでは、自分の体験は物語の中で確認され、さらにそれをもう一度再現するという二段階をへる。小さい子どもに本を読んだりおはなしをするときに、子どもの実際の体験の中になんか聞いてもらえない。この文章を書いていたとき、寒い日の暮れ方の墨田川の傍の公園で、父親はさぞかし寒いだろうのに、小さい子どもがコンクリートの滑り台からすべりおろるのを、手で支え

て傍で見てやっていると出會つた。子どもは笑い声をあげて何度も滑る。そんな子どもに「滑り台の階段をよいしょと上がって高いなあと空をみたら、空が赤くなっていました。すべりおりて、ウワー超特急みたいだと思つたら、お父さんの手がのびてきました」というようなおはなしをしたら、きつとよろこぶだろうと思ひ、それぞれの体験を口ぐちに加えてくれるだろうと思つて見ていた。筋だけのおはなしをしても、きいてももらえないだろう。筋はあとから振返つたときに明瞭になるものであつて、はなしの一こまひとこまは、子どもの体験に訴えるものでなければならぬ。だからおとなが筋書きを作つて、それに合うように役をふりあて、せりふをきめて構成したような劇は、それがどんなに立派にみえても、それは子どもものではなく、子どもにとっては意味をもたないのである。

子どもはおとなと一しよに、あるいは友だちと自分の体験のイメージを再現して遊ぶだけでよいのである。

劇あそびは子どもの過去の体験のイメージを現在に持ちきたらして、子どもなりに、そのことの意味をより明瞭にする作業であるとも言えるだろう。過去を現在に持ちきたるときには、過去

はその時の変化する表面の具体的状況から切り離されて、本質的な部分を浮きぼりにして舞台にのせることになる。そのような作業を三歳児は抽象的に言語化された形で行なうのではなく、身体を動かすあそびの形で行なうのである。このような作業はおとなにまで継続する精神のはたらきの原型とも言えるものであつて、おとなになれば、もっと反省的思考、あるいは回想的思考の形をとる。反省的というのは倫理的規準に照して省みるというのではなく、現在の位置から過去の本質を見きわめようとするという意味であり、回想的という時も過去の事実の記憶や感傷をいふのではない。そのときには自分でも理由が分からずに泣きわめいたり、あるいは何か感動した現象のみしか明らかでなかつたことが、時間を隔てて眺望したときにその体験の意味が、その時点の現在なりに明瞭にすることができる、そのような精神のはたらきをいふのである。それはずいぶん幼い子どもにもそれなりの形であるものであつて、三歳児の劇あそびは、その一つの形であると言えよう。もちろんすべての三歳児が劇あそびを好むわけではないが、どの子どもも、原始的な形での反省的思考をしていると言つてもよいであらうと思う。

Aが力持ちの劇あそびをした九月二十五日にかいた描画がある。(六十一頁写真1参照)それは中央に人間らしいものが描か

れ、バックがみどり色で塗られたものであるが、右端は一本の線で区切られて、その内側のみが塗られている。すなわちその一本の線の内側の空間は、その背景の空間から浮き出て舞台のようになり、別の空間を作り上げている。一つの体験のイメージを過去から切り離して現在に持ちきたらしたかのようなのである。描画にも同じ精神のはたらきがみられる。

こう考えると、劇あそびで重要なことが明瞭になってくる。第一に、子どものなまの体験そのものが十分に生きられていることである。早く、急いで、中途半端に通り返るのではなく、自然にふれ、事物にふれ、人にふれてそれを充実して生きることが、人生の豊富な体験を貯えることになる。第二には、劇あそびに再現するときに筋だけを追うのでなく、子どもの体験を子どもなりに理解したように再現できるようにすることである。これは何もむつかしいことを言っているのではない。滑り台をすべりおろすときのスリル、路ばたで猫と出会ったときの驚き、だれかが足音をたてて近づいてきて扉を叩くときのおそろしさなどを、子どもが実感をもって何度も再現してゆくようなことである。

風に舞う木の葉のイメージ

Aの四歳の誕生日に近い秋の一日、Aと散歩にいったとき、道路を風に吹かれた木の葉が走っていった。私はきれいな木の葉を拾い、Aと一緒に籠にに入れて持って帰った。家に帰ってから拾ってきた木の葉をとり出して、せっかく拾ってきたのだから画用紙に貼っておくのがいいだろうと思って、画用紙に貼りはじめた。

Aは直ちに私の画用紙をわきから取って、赤いクレヨンでかきはじめた。そのときに描いた絵が四枚ある。一枚は赤いクレヨンの円の中に人間が四人描かれたものであり、一枚は貼った木の葉のまわりに同様の赤いクレヨンの円の重なりと人間が描かれたもの(写真2)、もう一枚は、赤いクレヨンの円の中に十人以上も人間が描かれ、さらにオレンジ色と茶色の渦巻きと、Aがいつも美しいものを描こうとするときに好んで描く赤い球のネットワークが描かれて、その上に木の葉が貼つてある(写真3)。おそろく二枚目(写真2)は、私が木の葉を貼ったものまわりに描いたものであり、三枚目(写真3)は、Aが描いたものの上に私が木の葉を貼つたのであろうと思う。この作業をしていたとき私はAの傍にいたが、散歩にいった木を拾ってきた木の葉を貼ったり、子どもは絵を描いてしばらくの時を過ごしたのだから、それで満足し、その次の忙しさに追われて何を描いたのかもよく見ないで過ぎて

しまった。もちろんそのときはそれでよかったのだと思うが、数年後にこの絵をとり出して見ていたときに別のことに気が付いた。

ここに描かれているのは渦巻であり、美しさである。Aは美しいものを描き、作ろうとする試みをしばしばするが、そのときに赤色を用い、赤の球の連なりを描く。その絵は全体が渦巻の回転をしており、描かれている人間も渦巻の中を動いているように見える。私はこの一連の絵をあらためて見直して、回転の動きと美しさに魅せられて感情の高揚を感じさせられた。前に述べた四歳の誕生日のころのAの高揚した気分を考え合わせるとき、このころのAの一般的生活感情がこの絵に反映されていると言えると思う。さらに加えて、散歩について木の葉を拾ってきた直後にこれが描かれたことは、このときの木の葉のイメージと関連があると考えてよいだろうと思う。それで私は同じころの秋の日に木の葉のイメージを探ろうと思い、同じ道をゆっくりと歩いてみた。木の葉はからからと音を立てて道路を走っていた。ふと上を見ると、木の葉が落ちながら空中を舞っている。風の中を乱舞する木の葉は実に美しかったが、それまで私は空中を落ちつつある木の葉に足をとめて見とれたことがなかった。いつもすでに落ちた木の葉を見ていた。その後、風のない静かな日に、公園の林の中に

立っていたとき、木の葉が枝から落ちるときにかすかな音を立てるのを聞いた。葉柄が離れるときの音である。

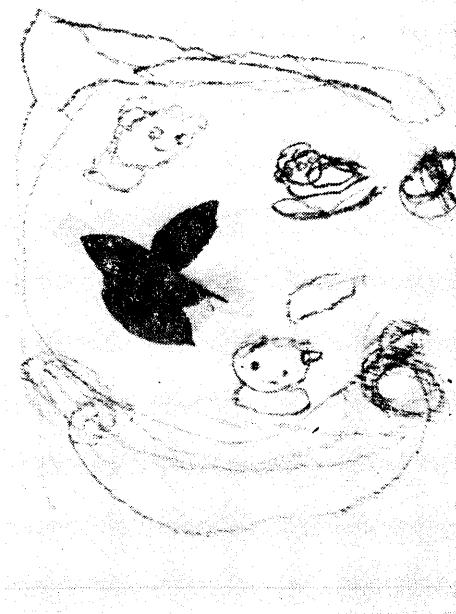
子どもは落ちた木の葉ではなくて、空中を落ちつつある木の葉に感動し魅せられているのかもしれない。私が木の葉を拾って持ち帰り、画用紙に貼ったとき、空中を風に舞う木の葉のイメージには少しも気付いていなかった。しかし子どもはその木の葉のまわりに、直ちに渦巻の動きと美しい赤い球を描いた。空中を渦巻いて落ちる木の葉の美しさの表現である。子どもはどこにでも率直に自分の感動を表現しているのに、おとなはそれに気付かないのである。

おとなは、落ちている木の葉の形や色にしか気が付かない。しかし子どもは、木の葉に全く違ったイメージを感じている。ここでは空中を廻転して舞う木の葉をとり上げたが、もっと全く違った感じ方もあるだろう。おとなの観点からそれを分類することを要求し、貼ることを要請したら、子どもは自分のイメージを十分に味わい生きることができなくなってしまふ。子どもは、その時、その時のイメージを十分に感じて生きることが、豊かな経験をしてゆくことになるのであると思う。劇あそびでふれたように、そこで感じとったイメージを何らかの形で再現するとき、子ども自身でそのことを確実に認識してゆくことができるのであ

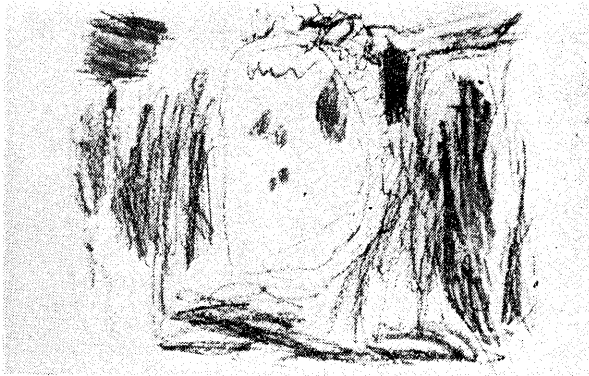
った。最初の感動が十分に生きられなかったら、そのあとの発展を望むことはできないであろう。

もう少し写真2の描画の説明を加えておきたい。ここには人間が何人も描かれている。Aは丁度同じころ、いろいろの名前の友だちを作りだしてひとりで遊んだ。「ミーコちゃん、ミリオちゃん、ビーリーちゃん、ルリコちゃん、ジャリーちゃん、ダルちゃん、タミリップ先生、ミルちゃん、クルちゃん、とそいだけで遠足にいくんだ」などと言って、お弁当を作って出かけるしたくをする。こういうことからみると、この画の中の人間は、風の中を一緒に踊りまわる友だちであるのかもしれない。それから写真2と同じころの別の日に描かれた写真4は、赤色のクレヨンの渦巻きと強くこすりつけた部分、及び緑色の渦巻きの美しい画であるが、紙のへりにはさみで刻みがいれてある。はさみで刻みをいれた部分は、指先でふれるとひらひらと動く。これは渦を巻いて動く動きの感覚を出したものであろう。このころに、この子どもはいろいろの機会に、こうした回転の動きの体験をしていたのではなからうかと思う。

(つづく)



◀写真2 四歳零か月
赤いクレヨンの線。
葉は実物を貼ったもの。



◀写真1 四歳零か月
 バック 緑、顔の線 赤、下部には白
 も使われている。クレヨン。赤い線の
 区切りがある。



▶写真3 四歳零か月
 赤いクレヨンの線、オレンジ色のうず
 まき、茶色のうずまき。葉は実物を貼
 ったもの。



◀写真4
 大部分は赤いクレヨン。
 中央部のうずまきの線は
 一部緑。